

金子みすゞの生涯と童謡にみる仏教生命観

―『南京玉』『大漁』『お仏壇』の意義

鍋 島 直 樹

序

仏教のいのちへのまなざしとはどのようなまなざしなのだろうか。童謡詩人の金子みすゞ（一九〇三―一九三〇 本名テル）の詩は、みすゞの没後五四年後の一九八四年に、上山正祐、矢崎節夫、大村祐子らの努力により『金子みすゞ全集』（JULIA出版）として世に送り出された。出版を縁として、金子みすゞの詩は蘇えり、世界中の人々に愛され、仏教的死生観と生命観を深く考えさせてくれる。

金子みすゞは、一九〇三年、山口県大津郡仙崎村に生まれた。父はみすゞが二歳の時に亡くなり、みすゞが三歳の時、まだ一歳の弟正祐は、下関にある上山文英堂の店主、上山松蔵とフジの養子となった。こうして仙崎の金子家は、祖母ウメ、母ミチ、兄堅助、テルの四人となった。しかし、信心深い祖母ウメと働き者の母ミチが見守る中で、みすゞは明るく育っていった。また下関の上山文英堂の後押しで、仙崎で金子文英堂を開業した。一九二三年、みすゞは下関随一の書店上山文英堂の支店で働き始めた。仕事のかたわら、ペンネーム「みすゞ」で童謡を書き、雑誌に投稿した。それらの詩はみすゞが二十歳の時、雑誌『童話』等の誌上で西條八十に認められ、彼女は若き童謡詩人たち

の憧れの女性となつていった。二十三歳で結婚し、一人娘ふさえに恵まれた。しかし、みすゞは、夫から詩作を禁じられ、病氣も重くなった。二十六歳の時、五二二編の詩を三冊の童謡集に清書し、娘ふさえの話す言葉を集めた『南京玉』を書いた。一九三〇年二月、辛い生活ののち離婚した。娘のふさえを引き離そうとする夫に抗い、三通の遺書を残して、三月十日、二十六歳の短い生涯を閉じた。

没後、みすゞの作品は埋もれていたが、矢崎節夫がその学生時代に「大漁」というただ一編の童謡に感動し、みすゞの作品を探しつづけた。ついに十六年後、弟の上山正祐（ペンネーム雅輔）が大切に保管していたみすゞの遺稿集・三冊の手帳が一九八二年に見つかり、正祐から矢崎節夫に託された。その三冊の手帳には、五二二編のものみすゞの作品が綴られていた。遺稿集は、JULA出版局の大村祐子代表らの熱意により、『金子みすゞ全集』、選集や童謡画集となつて出版された。金子みすゞの詩は、日本の教科書に掲載され、多くの言語に翻訳されて、世界の人々に愛読されている。金子みすゞの童謡に込められた仏教的死生観と生命観を身近に感じることができたのは、二〇〇七年六月二十五日、長門市立金子みすゞ記念館の矢崎節夫館長による特別講義「あなたはあなたでいいのーうれしい金子みすゞさんのまなざし」⁽¹⁾を龍谷大学顕真館で聞いて深く感動してからである。その特別講義では、「蜂と神さま」「大漁」「こだまでしょうか」「さびしいとき」「犬」「土」「積った雪」「私と小鳥と鈴と」「星とたんぽぽ」「ころ」の作品の意味について教えていただいた。矢崎館長は、その講演で、ネパールの子ども達が金子みすゞの詩の世界に触れて笑顔になり、ネパールの子ども達が日本語で「星とたんぽぽ」を元気に楽しく朗読する音声聞かせてくださった。この矢崎館長の特別講義を縁として、二〇一一年十一月十九日から二〇一二年一月三十一日まで、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の龍谷大学人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センターにおいて、『金子みすゞ いのちへのまなざし』『星とたんぽぽ』展を龍谷大学至心館バドマで開催した。その成果として図録『金子みすゞ いのちへのまなざし』『星とたんぽぽ』を出版した。その展示にあたり、金子みすゞ著作保存会、金子

みずゞ記念館 矢崎節夫館長、草場睦弘主任、金子みずゞ顕彰会、JULA出版局、大阪府立中央図書館、国際児童文学館、山口県長門市、下関市の有縁の皆様、特段の協力と支援をいただいた。本論は、その感謝を込めて、金子みずゞの仏教生命観の意義を、彼女の生涯と作品考察、および彼女の生まれ育った山口県仙崎と下関への訪問調査を組み合わせてまとめたものである。

本論では、金子みずゞの生涯と作品の先行研究であり、みずゞの弟、上山正祐やみずゞの家族縁者との面接、出版物や手紙の実証的な調査を基にしてまとめられた矢崎節夫著『童謡詩人金子みずゞの生涯』（JULA出版局、第二十刷、二〇一二年）に学び、第一に、金子みずゞの生涯と作品を仏教的環境に注目しながらふりかえる。特に、みずゞが二十六歳で自殺した気持ちに心を寄せて理解したい。それとともに、彼女の没後、みずゞの一人娘のふさえに、母の愛情が『南京玉』を通して、どのように受け継がれていったかについて考察したい。すなわち、金子みずゞの自殺に至った心理分析が目的ではなく、その自殺という悲しみに込められたみずゞの愛情と、娘ふさえに死を超えて受け継がれていった母の愛情を明らかにしたい。そのために、上村ふさえに筆者が思いがけず会えて、彼女の母みずゞへの思いを教えていただいたことも紹介する。第二に、金子みずゞの童謡作品「大漁」「お魚」「鯨法会」「報恩講」「お仏壇」を紹介して、みずゞの仏教生命観を考察する。本論では、みずゞゆかりの山口県仙崎の寺院や史跡、金子みずゞ記念館への訪問調査を取り入れながら、みずゞの詩にこめられた真意を解きほぐし、みずゞの仏教的死生観と生命観を明らかにしたい。

一 金子みずゞの生涯 自殺の背景に心を寄せて

金子みずゞ（一九〇三～一九三〇 本名テル）は、矢崎節夫著『童謡詩人金子みずゞの生涯』⁽²⁾によると、一九〇三年（明治三六）四月十一日、山口県大津郡仙崎村（現在の長門市仙崎）の地で、父、金子庄之助、母ミチの長女とし

て誕生した。みすゞには、二歳年上の兄堅助と、二歳年下の弟正祐がいた。みすゞの二歳の頃、父は上山文英堂清国営口支店の支店長として遠く海外に渡った。しかし、一九〇六年（明治三九）二月十日、みすゞがまだ二歳の時に、みすゞの父、庄之助はその清国営口で亡くなった。父の亡き後、一九〇七年（明治四十）一月十九日、みすゞが三歳の時、まだ一歳の弟正祐は、下関にある上山文英堂の店主、上山松蔵とフジの養子となり、もらわれていった。こうして仙崎の金子家は、祖母ウメ、母ミチ、兄堅助、テルの四人となった。しかし、信仰心の篤い祖母ウメと働き者の母ミチのぬくもりの中で、みすゞは明るく育っていった。この頃、下関の上山文英堂の後押しで、金子家は生計をたてなおすために、仙崎で唯一の書店、金子文英堂を開業した。金子みすゞは、瀬戸崎尋常小学校、郡立大津高等女学校へと進んだ。小学校時代、みすゞは成績が首席で、一年生から六年生まで級長を勤めた。高等女学校の時代、みすゞは、学校の成績は二番、三番になるほどであった。また、兄の堅助が家業に励んでくれたので、みすゞは高等女学校で勉学できる幸せを感じていたと考えられる。みすゞは仙崎の豊かな自然に囲まれて育った。げんげ畑、かたばみ、桃、山ざくら、すかんぼ、あさがお、夕顔、曼珠沙華、芒、栗、どんぐり、橙、蟻、繭、蚕、雀、かもめ、鰻、鯨、金魚、犬、土、露、草、空、海、雲、雪、星、月など、後の金子みすゞの作品にうたわれる生き物や自然へのまなざしが、この仙崎の自然な風土の中で育まれたと思われる。みすゞが十六歳の時、母ミチは、上山松蔵と再婚し、下関へ移った。これを機に、弟正祐との交流が始まった。ただ正祐はまだ堅介とみすゞが実の兄妹であるとは知らなかった。みすゞと正祐は音楽や文学についてよく話すようになった。みすゞは十六歳の時、大津高等女学校を卒業し、金子文英堂を手伝うようになった。

一九二三年（大正一二）、みすゞは二十歳の時、下関随一の書店上山文英堂の支店（下関市西之端町商品館内）で、店番として働き始めた。兄の堅介が結婚し、仙崎の金子文英堂を継いでいたので、母みちがみすゞのことを配慮して下関に呼び寄せたのだらう。また、下関に移り住む直前に、みすゞの手作りの詩集『こはれたびあの』を親友の田辺

豊々代に贈った。下関は、当時、大陸と貿易する大きな経済都市であった。仕事のかたわら、ペンネーム「金子みすゞ」で童謡を書き、雑誌投稿を始めた。二十歳のみすゞが書いた詩は、誌上に掲載された。雑誌『童話』九月号に「お魚」「打出の小槌」、『婦人倶楽部』九月号に「芝居小屋」、『婦人画報』九月号に「おとむらい」、『金の星』九月号に「八百屋のお鳩」が掲載された。みすゞは西條八十に認められ、若き投稿詩人たちの憧れの星となっていた。一九二四年（大正十三）四月十八日、西條八十がフランスに渡った。一方、正祐は家業を継ぐ心が定まらず、みすゞを実の姉とは知らずに、恋心をいだいていた。一九二五年（大正十四）五月十八日、みすゞが二十一歳の時、正祐は、徴兵検査の通知によって、上山松蔵が自分の養父であることを知った。この年、みすゞは自選詩集『琅玕集』を始める。この一九二五年七月二日に、親友の豊々代が病気で亡くなった。豊々代は、みすゞの童謡のよき理解者であった。この年の後半、松蔵はそうしたことを心配して、みすゞに、上山文英堂の番頭候補との結婚を勧めた。

一九二六年（大正十五）一月六日、正祐は、みすゞの結婚に反対し、建白書をだした。同年二月一日、正祐は仙崎を訪問し、翌二日、午前中、弟の正祐は兄の堅助と姉のみすゞの三人で話し合った。午後、三上山の麓を歩きながら、正祐とみすゞが二人して話し合った。正祐が「親父の犠牲になって結婚することはない」とくりかえして言うのと、「でも仕方がないの」と、みすゞはいった。「ほかに好きな人はいないのか。いるなら、その人と結婚すればいいじゃないか」と正祐が涙を流して談判すると、「今なら、いる」「その人は、黒い着物を着て、長い鎌をもった人なの」とみすゞが答えたという。⁽⁴⁾そして、正祐は思い切つてみすゞに尋ねた。

「テルちゃん、テルちゃんと僕は姉弟ではないのかい」

一瞬みすゞは正祐の顔をじつと見つめた。そして、こくんとうなずいた。⁽⁵⁾

みすゞと正祐が姉弟であることを、みすゞ自身も正祐に認めたのである。正祐は後になって、

「長い着物を着て、長い鎌を持った人というのが死神だと気がついたのは、金子の家に戻ってからでした。…中

略…自分をなくしても、まわりが幸せならそれで嬉しいというわけです。自分がすべきことなら、それを受け入れて生きようと思っていたのですね⁽⁶⁾」

と回想している。一九二六年二月二六日、みすゞは二十三歳の時、上山文英堂の店員と結婚した。この頃には、第一童謡集『美しい町』第二童謡集『空のかあさま』を完成した。同年三月、西條八十が帰国した。『童話』四月号で「露」が特別募集童謡入選第一席をとった。この頃、上山松蔵とみすゞの夫との関係が悪化し、離婚の話が出た。しかし、みすゞが身ごもっていることがわかり、離婚は取りやめとなった。この一九二六年七月に、童謡詩人会編『日本童謡集』に「お魚」と「大漁」が掲載された。みすゞは童謡詩人会への入会を認められた。この童謡詩人会は、泉鏡花、小川未明、北原白秋、西條八十、島崎藤村、野口雨情、与謝野晶子など、錚々たる作家や詩人三三名で、一九二五（大正十四）年に発足した会である。みすゞは与謝野晶子に次ぐ二人目の女性会員であった。

一九二六年十一月十四日に、一人娘ふさえに恵まれた。しかし悲しい出来事がつづいた。一九二七年（昭和二）八月十二日、みすゞが二十四歳の時、祖母ウメが亡くなった。同年秋、夫は食料玩具店を『辰巳屋』の屋号を掲げて始めた。この頃に、テルは夫からうつされた淋病を発病した。一九二八年（昭和三）秋、みすゞの二十五歳の時、夫から詩作や投稿仲間との文通をやめるように言われた。みすゞは二十六歳の時、三冊の童謡集『美しい町』『空のかあさま』『さみしい王女』を清書した。これが遺稿集となった。この夏、みすゞは次第に病気が重くなり床に伏すようになった。夫からうつされた性病が原因であった。十月より、娘ふさえの言葉を採集する『南京玉』を書き始めた。

一九三〇（昭和五）年二月、みすゞの二十六歳の時、夫と別居した。二月二七日、辛い生活の後に、正式に離婚した。みすゞは娘ふさえを自分の手で育てたいと思っていた。しかし、すぐに別れた夫から娘を引き渡せという要求がきた。親権は、その当時は、父親にしかない時代だった。三月九日、みすゞは三好写真館に写真を撮りにいった。桜餅をたくさん食べ、夕食後、ふさえをお風呂に入れ、たくさん童謡を歌った。「かわいい顔をして寝ちよるねえ」。それが、

母ミチが覚えているみすゞの最後の言葉となった。みすゞは娘のふさえを引き離そうとする元夫に抗い、三通の遺書を書き、写真の預け証を枕元に揃えて置いて、薬を飲んだ。一九三〇年（昭和五）三月十日、みすゞは上山文英堂の二階で、二十六歳の短い生涯を閉じた。みすゞの書き残した三通の遺書は、別れた夫、ミチと松蔵、正祐宛に宛てたものであった。別れた夫に宛てた遺書には、「あなたがふうちゃんをどうしても連れていきたいのなら、それは仕方ありません。でも、あなたがふうちゃんに与えられるものはお金であつて、心の糧ではありません。私はふうちゃんを心の豊かな子に育てたいのです。だから、母ミチにあずけてほしいのです」とあり、みすゞは母ミチに娘のふさえをどうしても育ててほしかったのである。母ミチと松蔵に宛てた遺書には、先立つ不孝を詫びて、「主人と私とは気性があいませんでした。それで、私は主人を満足させるようなことはできませんでした。…中略…一緒にいることは不可能でした」「くれぐれもふうちゃんのことをよろしく頼みます」「今夜の月のように私の心も静かです」と記している。みすゞの「月のように私の心も静かです」という文章には、みすゞの静かで強い決心が表れ、みすゞが母ミチに娘ふさえの養育をゆだねられる安心を感じ取ることができる。弟正祐には、三冊の詩集を託し、「さらば、我等の選手、勇ましく往け」とエールを書き送った。⁽⁹⁾弟正祐は、みすゞの童謡作品が誌上に発表されるたびに、みすゞの詩をほめたたえる感想を送り応援しつづけた。弟正祐のエールはみすゞが詩を書きつづける力となっていた。だからこそみすゞは、正祐の道にエールを送った。みすゞが苦悩の中で遺書を書き、命をかけて守った娘ふさえは、みすゞの母ミチの養女となり、心豊かに育てられた。金子みすゞの愛情は、やがて娘のふさえに伝わり、孫たちにも受け継がれている。

二、みすゞの娘ふさえの悲しみと感謝―母との絆『南京玉』

金子みすゞの死後、娘のふさえは、祖母ミチにあたたかく育てられた。しかしそれでも、ふさえは母みすゞのいな

かったことが寂しかった。母の亡き後、娘の上村ふさえはどのようにして母親の愛情を感じ取っていたのだろうか。娘ふさえは母を亡くして七十年余りを経て、母みずゝが三歳のふさえの言葉を書き留めた『南京玉』を二〇〇三年に出版した。その著に、ふさえは「母との絆『南京玉』」と題して、次のように書いている。

お母さん、なんと素敵な響きを持ったことばでしょう。お母さんと甘えた記憶のない私は、年を重ねて余計そう思います。死別して七十余年の歳月をすぎて、母と娘として向き合うとは、何という不思議な奇跡でしょう。お母さんが幼い私の言葉を書きとめ、『南京玉』と名づけた手帳が出版されることになりました。

「二月九日、止む。このごろ房枝われと遊ばず、われまたものうき事多くして、一語をも録せざりし日多し」の巻末の言葉に、長い間こだわっていました。子どもの時から、西條八十先生のお弟子で詩人であったことは知っていましたから、お母さんは「繭とお墓」の詩のように天使になって、空のあなたに飛んで行ったと思っていた。十五歳の時、偶然にも遺書を読んで、大変ショックを受けました。やはりお母さんは、愛なく結婚し子どもを生み、そして私は捨てられたのだと思いました。…中略…上山の雅輔叔父さんが、大切に持っていた三冊の詩集が、『大漁』の詩に感動して、みずゝ探しをしていらした矢崎節夫先生の、十六年をかけた執念のおかげで、世に出て二十年近くたちました。多くの方々のおかげで、お母さんの詩は驚くべき早さで広まり、『南京玉』も大変意味ある手帳となりました。今とても大切と言われている母から子への読みきかせをしていたことが、言葉のふしぶしに感じられて、お母さんが私に愛情を持つて接してくれたことがわかり、私にとって、大切な心の宝物となりました。…中略…『南京玉』は私の人生観を大きく変えて、お母さんの娘として生まれて良かった、と思えるようになりました。私の命を大切に思つて、道連れにしないでこの世に残してくれたことで、娘が生まれ、孫二人に命がつながりました。心も体も弱かった私が、遅しく生きぬいて、多くのみずゝ大好きな素晴らしい方々と、お母さんの代わりにお会いできる俸せに恵まれています。これからも人と人との有難い出会い、不

思議なえにしを、大切に生きてゆきたいと思っています。…中略…やがて私も仲間入り、今度であった時には、親がいなくても良く頑張ったねと誉めてくださいますか。⁽¹⁰⁾

また実際に、金子みすゞの娘、上村ふさえが書いた次のような直筆メッセージがある。

象

浜圭介先生の作曲された歌をきいて、象の詩を記憶していなかった私の心に、みすゞの素敵な詩の世界が、また新しい広がりを見せてくれました。それからしばらくして、みすゞが私の言葉を書きとめて残してくれた南京玉の中に、私のコトバをみつけました。「ブウチャンモ象ガ欲シイネ、オカアチャント、ブウチャント、象ニノツテユクネ、アシタ」

本当におどろきました。どのように話してくれたのか、覚えてないし、三歳の私にかえりたいと思いました。南京玉のお蔭で、大きな母の愛を、私は感ずることができました。そして、残りの人生に大きな光となりました。今度会ったら、たくさん、たくさん、お話ししてください。

よみがえらせてくださった矢崎先生、多くのみすゞ大好きな方々に、感謝の日々です。上村ふさえ⁽¹¹⁾

ここに明らかなように、娘ふさえは、母みすゞの自殺について、幼い頃は寂しく母に捨てられたように思っていた。しかし、「矢崎節夫先生の十六年をかけた執念のおかげで」、みすゞの三冊の詩集が弟の上山正祐のもとで発見され、世に出版されて、またたく間に多くの人々にみすゞの詩が愛されるようになった。それが縁となって、娘ふさえは自分の三歳時の言葉を記してくれた母の『南京玉』を見つめ直した。そして、ふさえは『南京玉』の中に「ブウチャンモ象ガホシイネ、オカアチャント、ブウチャント、象ニノツテユクネ、アシタ」と自分の言葉が記録してあるのを再発見して、母親の深い愛情を感じ取ることができた。『南京玉』を書き綴った母みすゞの気持ちには、娘への限りない愛情そのものであったと、ふさえは気づいた。『南京玉』は、母みすゞが三歳の娘ふさえの一挙一動を大切に見守つ

た証であった。娘ふさえの心に、母のつづった『南京玉』を通して、母みすゞの愛情がよみがえり、母の愛が今も大切な娘の心に生きている。「仏さま」となったみすゞは娘ふさえのメッセージを知って、きつと喜んでいるにちがいない。

二〇一二年八月二十三日、広島で開催された『没後八十年 金子みすゞみんなちがつて、みんないい』の展示会で、上村ふさえと面会で、そうした母への想いを聞かせていただいた。その時、『金子みすゞ 南京玉―娘ふさえ・三歳の言葉の記録』（JULA出版局）の本に、上村ふさは「母との絆 南京玉」と直筆のサインを書いてくれた。その言葉に母と娘の死を超えたつながりが確かであることがわかる。

三、金子みすゞのいのちへのまなざし

1、幸せとさびしさとの同居―「大漁」「お魚」

いのちあるものすべては、死の悲しみを包含しながら、生の輝きを放っている。いのちの尊さを守る心は、一つひとつのいのちに喜びと悲しみの両面があることを知るところに醸成される。

いつの時代の人も、幸せとともに、困難や寂しさを感じて生きている。童謡詩人、金子みすゞもその一人である。世間が賑わっているその一方で、せつない想いをしているものたちがいる。金子みすゞの作品には、幸せな光景とともに、「かわいそう」「さみしい」といった言葉が同時に散りばめられている。みすゞの「大漁」「お魚」「鯨法会」いう詩は、すべてのいのちあるものの喜びと悲しみの両面をありのままに表している。

大漁

朝焼小焼だ 大漁だ 大羽鰻の大漁だ。浜はまつりの ようだけど 海のなかでは 何万の 鰻のとむらいするだろう。（『金子みすゞ童謡全集』第二卷一二―一三頁、JULA出版局）

おさかな

海のお魚はかわいそう。お米は人につくられる、牛は牧場で飼われてる、鯉もお池で麩を貰う。

けれども海のおさかなは、なんにも世話にならないし、いたずら一つしないのに、こうして私に食べられる。

ほんとに魚はかわいそう。（『金子みすゞ童謡全集』第一卷一二―一三頁）

金子みすゞは、自分たちの喜びとは対極にある他者の悲しみを感じ取っている。幸せを喜んでいる人のすぐそばで、独りぼちで悲しんでいるものたちがいる。多くの生き物の生命を頂いて、私が生かされている。だからこそ、相手の身になって、自分自身をふりかえることが大事であることを、これらの詩が教えてくれる。しかも、この「海のお魚はかわいそう」「ほんとに魚はかわいそう」というのは、センチメンタルな感情を表しているだけではないだろう。なぜなら、かわいそうだから、みすゞは魚を食べなかったのではない。かわいそうと感じつつ「私に食べられる」と記しているからである。かわいそうと思って、その生命に感謝して頂くところにこそ、魚のいのちの尊さがある。感謝して頂くところ、その魚のいのちの尊さは、その魚のいのちを力にして生きる私のいのちの尊さと一つになる。

2. 鯨の追悼法要へのまなざし―「鯨捕り」「鯨法会」

金子みすゞの生まれ育った仙崎は、日本海に面した漁師町である。江戸時代中期から明治初期までは日本有数の捕鯨基地であった。また、北前船の寄港地としても栄え、文化や物産の交流が盛んであった。捕鯨の際、浜辺は漁師たちで活気づくとともに、鯨の血で沿岸は赤く染まった。その捕鯨の様子は、金子みすゞの詩「鯨捕り」にもこう記されている。

むかし、むかしの鯨捕り、ここのこの海、紫津が浦。海は荒海、時季は冬、風に狂うは雪の花、雪と飛び交う鰯の縄。岩も礫もむらさきの、岸さえ朱に染むという。（『金子みすゞ童謡全集』第六卷一〇三―一〇四頁）

しかも金子みすゞは、その「鯨捕り」の詩の中で、

いまは鯨はもう寄らぬ。浦は貧乏びんばになりました。（『金子みすゞ童謡全集』第六卷一〇五頁）

とも記している。ここより、捕鯨が衰退していったこともうかがわれる。ところで、南の海に向かう鯨のお腹からは胎児が出てくることも多かった。仙崎の対岸にある青海島の通（かよい）には、浄土宗の向岸寺がある。二〇一一年、その向岸寺に訪問した。古く江戸時代に向岸寺僧侶の讃誉が、捕獲した鯨の命を追悼するとともに、捕鯨によって助けられなかった鯨の胎児の追弔法要を始めた。

通浦では、延宝七年（一六七九）、向岸寺第五世讃誉上人は五一歳で隠居し、清月庵（観音堂）を営み、捕鯨の菩提をともらう。それ以来、通鯨組に鯨の胎児を弔う必要性を十三年の歳月をかけて訴える。元禄五年（一六九二）清月庵に「鯨墓」を建立と同時に「鯨位牌」「鯨鯢過去帳」を作成し、清月庵で讃誉上人は鯨の回向を実施する。当時の宗教界では人間以外絶対に向向できなかつたのです。「享保一九年（一七三四）に讃誉上人（一〇六歳）は入寂し、浦の行事として鯨回向をおこなう」。当時、鯨組の人々は春の漁が終えた頃、五日間羽織袴でお参りしたといいます。¹²

このように漁で捕獲した鯨たちの墓が一九九二年から、向岸寺境内に建てられた。向岸寺には、鯨の位牌、鯨たちの鯢鯢群げいげんぐん類過去帳がある。向岸寺の清月庵には、母鯨（鯢）の胎内にあった胎児七十数頭を埋葬した鯢墓がある。その清月案の鯢墓の正面には、「南無阿弥陀仏」と上の方に大きく記され、その下に、「業尽有情 雖放不生 故宿人天 同証仏果（業尽きし有情放つと雖も生ぜず、故に人天に宿して同じく仏果を証せしめん）」と刻まれている。この鯢墓の横に設置されている『国指定史跡 青海島鯢墓』（山口県長門市教育委員会）の解説を参照し、その刻文の意をうかがうと、「我々人間は、お前たち鯨の胎児を捕るつもりはない。できることなら海に帰してやりたい。しかし、海に放つてやつてもとうてい生きてはいけなからう。鯢として生命は母鯢と共に終わってしまった子鯢よ。なら

ばどうか人天界に生まれて、仏の功德を受け、等しく仏と成つてさとり⁽¹³⁾にいたつてほしい」という内容である。そうした捕鯨でやむなく命を失つた鯨を追悼し、漁師たちが寺院に集まる法事が執り行われてきた。

浄土宗の向岸寺で始められた「鯨回向」という鯨の追弔法要は、仙崎の浄土真宗本願寺派遍照寺にうかがうと、浄土真宗でも「鯨法会」として勤修されたという。金子みすゞは、それを「鯨法会」という詩に記している。

鯨法会^{くじらほうえ}

鯨法会は春のくれ、海に飛魚^{とびうお}採れるころ。浜のお寺で鳴る鐘が、ゆれて水面^{みづの}をわたるとき、村の漁師が羽織着て、浜のお寺へいそぐとき、沖で鯨の子がひとり、その鳴る鐘をききながら、死んだ父さま、母さまを、こいし、こいしと泣いてます。海のおもてを、鐘の音は、海のどこまで、ひびくやら。（『金子みすゞ童話全集』第六卷一二八―一二九頁）

浜に近いお寺に、捕鯨で死んだ鯨の父と母を偲び、村の漁師たちが羽織袴でお参りにでかける。お寺の鐘の音が海に響く。その海の沖では、ひとり遺された子鯨が父と母を慕って泣いている。ゴーンとなるお寺の鐘の聲が人間の住む町だけでなく、子鯨の住む海にまで遠くこだましていく。捕鯨という漁業は、仙崎の人々を豊かにしてくれる生業であるからこそ、漁師たちがお寺に集い、僧侶とともに仏に手を合わせ、漁獲した鯨の命を弔い、遺された子供の鯨の悲しみを忘れないでいたことがよくわかる。しかも矢崎節夫著『みすゞさんのうれしいまなざし』を読んで、「鯨法会」に関する新しい事実を知った。

じつは、みすゞさんの故郷の長門市を訪ねて二十六年もたつのに、鯨の過去帳は捕鯨をしなくなってからは、もう終わっているものだとはかり思っていました。ところが、最近になって、新しい過去帳に今も鯨の戒名が書き加えられていることを知ったのです。この地区には時どき、鯨が岸に打ちあげられたり、魚の網にかかってしまふことがあるのだそうです。その鯨に戒名をつけ、供養し、過去帳に書き加えるという人と鯨の法縁が、三百

年以上もの時を超えて、今も続けられていたのです。…中略…今年もみずさんのふるさとのお寺では、春のく
れに、鯨法会、鯨回向と呼ばれる法要が行われていることでしょう。静かに浜にたつて、鯨のいのちに佇ん
だ一人の少女のまなざしは、今もこの地に生きているのです。⁽¹⁴⁾

江戸時代以降始められた鯨回向、鯨法会は終わっていないかった。捕鯨をしなくなった現在も続けられていた。亡く
なった鯨や鯨たちに、今も変わりなく手を合わせて弔い感謝する仙崎の人々の姿は実に尊い。

四、みずを育んだ仏教的な環境とみずの童謡「報恩講」「お仏壇」

1、みずを育んだ仏教的な環境

金子みずの生まれ育った仙崎の中心街、みず通りには、金子文英堂があり、遍照寺、浄岸寺、西覚寺、極楽寺、
普門寺など寺院が立ち並ぶ。各寺院の境内には墓があり、街の人々は、毎朝お寺に行き、墓参りをしてから、仕事に
向かうという。上山大峻の研究によれば、山口県の日本海側の阿武郡、大津郡一帯を北浦地方と呼び、本願寺第八代
門主の蓮如（一四一五―一四九九）の頃に、浄土真宗の念仏の教えが北浦地方に伝わり、現在も、長門市仙崎の仏教
寺院には、浄土宗の極楽寺、西円寺、円究寺、法華宗の普門寺と並んで、浄土真宗の清月寺、遍照寺、清福寺、西覚
寺、浄岸寺がある。その浄土真宗の生命観とその生活について、上山大峻はこう論じている。

親鸞聖人のご命日（一月十六日）である毎月十六日や、父母の命日には、生き物の生命をとることを慎んで、
食事を「精進」にするしきたりをずっと守ってきたものです。特に漁村ではそうでした。…中略…金子みずの
詩の底流にあつて、その魅力になっている「さびしい」「かなしい」という思いは、名もない生命へのかぎりな
い愛情と、その生命を捕って生きていかなければならない人間の業の深さに気づいた、どうしようもない悲しみ
にあるように思えるのです。⁽¹⁶⁾

人間は、他の生き物の命を自分が頂いて生きるからこそ、その生き物たちの命への慈しみと悲しみを忘れない。こうした仏教の生命観と慈しみが、金子みすゞのいのちへのまなざしを育んでいるのだろう。『歎異抄』第五章に、「一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり。いづれもいづれも、この順次生に仏に成りてたすけ候ふべきなり」(『浄土真宗聖典全書』二卷一〇五六頁、本願寺出版社)と記されている生命観は、そうした親鸞の命あるものすべてへの慈しみを象徴している。また、古莊匡義の研究によると、仙崎の周辺では、安永八年(一七九九)から、青海島の大日比にある西円寺で小兒念仏会が開かれ、その小兒念仏会では、毎月五日に、寺院に子供を集めて、法話や昔話を聞かせて、仏前に供えたお菓子を配り、念仏を共に称えるものであったという。¹⁸⁾ こうした日曜学校が、みすゞの育った頃も、仙崎の各寺院で盛んに行われ、子どもたちが楽しみにしていたという。¹⁹⁾ 仏教の香りが仙崎の人々の生活にしみこんでいる。町の人々はすれ違ふと、笑顔で挨拶を交わす。金子みすゞの墓は、浄土真宗本願寺派遍照寺の境内にある。また金子みすゞを慕っていた弟、正祐の遺骨もみすゞと同じ墓に納められている。『童謡詩人金子みすゞの生涯』に紹介されている大島ヒデの回想によると、みすゞの家の二階の部屋を借りて、三隅の西福寺の和道實先生を中心に、大島ヒデら六人が、『歎異抄』を読んだり、法話を聞いたりしていた。祖母ウメも母ミチも一緒に聞き、小学生のみすゞ(テル)も聞いていたと伝えている。

2. みすゞの童謡「報恩講」「お仏壇」の意義
金子みすゞの詩には、「お墓」「お仏壇」「仏さま」に関わる歌がいくつも見られる。

報恩講

「お番」の晩は雪のころ、雪はなくても暗^{やみ}のころ。くらい夜みちをお寺へつけば、とても大きな蠟燭と、とても大きなお火鉢で、明るい、明るい、あたたかい。大人はしっとりお話で、子供は騒いじゃ叱られる。だけど、

明るくにぎやかで、友だちやみんなよっていて、なにかしないじゃいられない。更けてお家へかえっても、なにかうれしい、ねられない。「お番」の晩は夜なかでも、からころ足駄あしだの音がする。(『金子みすゞ童謡全集』第四卷五六―五七頁)

お仏壇

お背戸せどでもいだ橙だいだいも、町のみやげの花菓子はながしも、仏さまのをあげなけりや、私たちにはとれないの。

だけど、やさしい仏さま、じきにみんなに下さるの。だから私はていねいに、両手かさねていただくの。

家にお庭はないけれど、お仏壇にはいつだって、きれいな花が咲いているの。それでうち中あかるいの。

そしてやさしい仏さま、それも私にくださるの。だけどこぼれた花びらを、踏ふんだりしてはいけないの。

朝と晩とおばあさま、いつもお灯明あかりあげるのよ。なかはすっかり黄金きんだから、御殿ごてんのように、かがやくの。

朝と晩とに忘れずに、私もお礼をあげるのよ。そしてそのとき思うのよ、いちんち忘れていたことを。

忘れていても、仏さま、いつもみていてくださるの。だから、私はそういうの、「ありがと、ありがと、仏さま。」

黄金きんの御殿のようだけど、これは、ちいさな御門ごもんなの。いつも私がいい子なら、いつか通ってゆけるのよ。

(『金子みすゞ童謡全集』第四卷二三―二三五頁)

金子みすゞの家の「お仏壇」について、『童謡詩人金子みすゞの生涯』には、こう記されている。

天窓のついた三畳の部屋と、六畳の奥座敷があった。ここで祖母ウメと母ミチが寝起きし、家族四人の楽しい食事が行われた。また、この部屋には仏壇があった。仏壇には毎朝ご飯が供えられ、朝と晩には必ずお灯明があった。祖母ウメや母ミチが折に触れ手を合わせる姿を見て、幼い頃からテルも堅助もよく手を合わせた。テルにとつて仏壇は、亡くなった父庄之助に会える魔法の場所であり、見えないけれど、いる、存在を感じる場所であった。⁽²⁾

「仏さま」に手を合わせ、亡き父を偲び、自分と向き合う。「お仏壇」の「仏さま」にお菓子を供えてから、お下がりのお菓子をいただく。この詩の中で、「お背戸」、すなわち、庭の裏口でとった「橙」を供えていると書かれている意味がわからず、山口県に住職に尋ね、金子みすゞ記念館ホームページによると、仙崎の方言で「ナツミカン（夏蜜柑）」はもとは「橙（だいたい）」と呼ばれていたことを学んだ。しかも、橙、すなわち、夏みかんの外皮もそのまま砂糖漬けにして細く切ってお菓子を作っていたことを知った。貧しい生活を凌ぐ柑橘類の貴重な食べ物でもあった。実際にその夏みかんの外皮の砂糖漬けをいただくと、橙の香りがして甘くておいしい。

みすゞは「お仏壇」に手を合わせると、忙しくて「仏さま」を忘れていたことを思い起こす。だから忘れている自分をいつも見守ってくれる「仏さま」に感謝する。彼女は日常生活のただ中で、「お仏壇」に手を合わせ、日常を超えた聖なるひとときを朝夕に過ごしていたことがわかる。みすゞにとって「お仏壇」は、お菓子を供え、「きれいな花」が咲き、灯明を捧げて、家族とともに手を合わせて、ありのままの自己に向き合える居場所であった。みすゞにとって、献花、献灯された「お仏壇」は、「黄金の御殿」のように光り輝き、極楽に通じる「御門」であった。こうした「仏さま」の明るさとぬくもりは、みすゞの心の休まる依りどころであったことが「お仏壇」の詩を通してよくわかる。

註

- (1) 鍋島直樹・玉木興慈・井上善幸編『地球と人間のつながり 仏教の共生観』所収、矢崎節夫「あなたはあなたでいいのー金子みすゞさんのうれしいまなざし」五五―八八頁、文部科学省オーブンリサーチセンター事業 龍谷大学人間・科学・宗教オーブンリサーチセンター、二〇一一年
- (2) 矢崎節夫著『童謡詩人 金子みすゞの生涯』、「金子みすゞ年譜」三五二―三五四頁、JULIA出版局、一九九三年
- (3) 矢崎節夫編『没後80年金子みすゞ みんなちがって、みんないい。』一五―一七頁、JULIA出版局、二〇一〇年

- (4) 矢崎節夫『童謡詩人 金子みすゞの生涯』一三〇頁、正祐の日記と回想に基づいている。
- (5) 前掲書二二二頁
- (6) 前掲書二二二頁
- (7) 前掲書二二八頁
- (8) 前掲書二二九頁
- (9) 前掲書二二九頁
- (10) 上村ふさえ「母との絆『南京玉』」、金子みすゞ『南京玉 娘ふさえ・三歳の言葉の記録』一六四～一六七頁、JULA出版局、二〇一一年
- (11) 『没後80年金子みすゞ みんながって、みんないい。』一二〇頁。鍋島直樹・古荘匡義編『金子みすゞ いのちへのまなざしー「星とたんぽぽ」五頁、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成事業 龍谷大学人間・科学・宗教オープンリサーチセンター、二〇一二年
- (12) 「鯨回向」、『古式捕鯨の里通』ホームページ、<http://member.hot-chatv/htc09819/ekou.html> 二〇一〇年九月六日閲覧
- (13) 矢崎節夫監修『幻の童謡詩人金子みすゞの世界展 図録』、三八～四〇頁。JULA出版局、一九九九年
- (14) 矢崎節夫著『みすゞさんのうれしいまなざし』一五八～一五九頁、JULA出版局、二〇〇八年
- (15) 上山大峻「北浦の仏教風土」一二二頁、矢崎節夫監修『童謡詩人 金子みすゞ いのちとこころの宇宙』所収、二〇〇五年、JULA出版局
- (16) 前掲書一二二頁
- (17) 古荘匡義「金子みすゞの生命観と大正生命主義」五三頁、鍋島直樹・古荘匡義編『金子みすゞ いのちへのまなざし「星とたんぽぽ」』、龍谷大学人間・科学・宗教オープンリサーチセンター、二〇一二年
- (18) 『童謡詩人 金子みすゞの生涯』四二頁、「この小児念仏会は、ロンドン大学教授チャールズ・ダンによって、世界最古の日曜学校であろうといわれている。」と記されている。
- (19) 前掲書四二頁

(20) 前掲書八四頁

(21) 前掲書五八～六〇頁

(22) 金子みすゞ記念館ホームページ「みすゞさんのことばの森・4」
<https://www.city.nagato.yamaguchi.jp/site/misuzu/20073.html> 二〇二〇年九月十八日閲覧

キーワード 金子みすゞ 死生観 自殺 『南京玉』 大漁 鯨法会 お仏壇